

App.1 Lacquerware (Excavation report of HwangNam DaeChong, vol.I

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: YUN, Geun-il メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00059500

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



卷 漢, 福建美術出版社.
金庚洙・俞惠仙・李容喜 2003 「樂浪漆器의 漆技法 調査 (I)」 『박물관보존과학』 4, 국립중앙박물관 :79-88.
[「樂浪漆器의 漆技法調査」 『博物館保存科学』 4, 韓国国立中央博物館]

岡田文男 2005 「伝奉牛子塚古墳から出土した夾苧棺断片の塗膜構造について」 『漆工史』 28号, 漆工史学会 42-49.

岡田文男 2005 「宋代の無紋漆器にみられる骨粉下地とその表現効果」 『漆工史』 28号, 漆工史学: 21-33.

太原市文物考古研究所編 2005 『北齊徐顕秀墓』 文物出版社.

西安市文物保護考古所 2006 「西安理工大学西漢壁画墓発掘簡報」 『文物』 2006-5: 7-44.

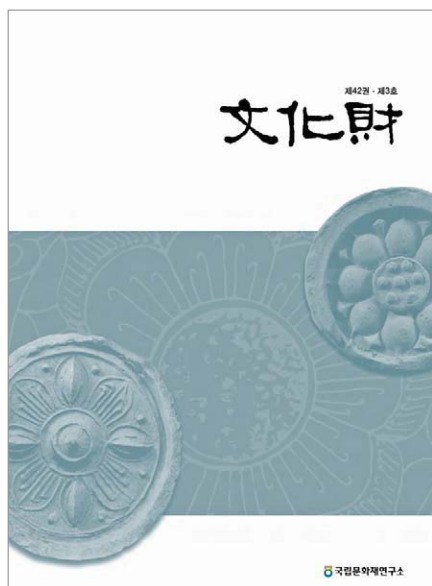
原載:

岡田文男・이운석・임지영 2009 「경주 황남대총 출토 칠제품의 재질 및 기법조사」 『文化財』 第 42 卷 3 号, 国立文化財研究所: 176-191.

公開先 (雑誌『文化財』 42 卷 3 号):

<https://www.nrich.go.kr/kor/subscriptionDataUsrView.do?menuIdx=1106&idx=87&gubun=J>

*ダウンロードは雑誌全体の PDF



翻訳後記:

皇南大塚については、文化財管理局文化財研究所から南墳と北墳の各報告書が刊行されている。両報告書とも各墳で出土した漆器の報告があり、また北墳報告書ではそれに加えて漆器文様の考察論文が掲載されている。その分類は本稿に反映されており、漆器に関する部分のみ訳文を付記する。図については掲載しないので、原報告書で確認していただきたい(公開先は末尾付記)。

付 1:

『皇南大塚 南墳発掘調査報告書』
漆器

윤근일 尹根一

(文化財研究所学術研究官¹⁾)

2) 漆器

漆器は主槨上東南隅、収槨部木蓋下の南便、収蔵部内という複数箇所から出土したが、大部分は収蔵部内から最も多く出土した。

a) 漆器小盃^{わん} (図版 236-1, 2、挿図 43)

副葬品収蔵部内南便の青銅甕²内で重ねられたまま出土した。出土当时には良好な状態であったが、その当時の漆器の保存処理は未熟であったため、破損が深刻である。したがって略報の内容を引用することにする。

3 点は薄く削って網代文様に編んだ竹皮を心にし、内面は朱色、外面は黒色に漆塗りした半球形の盃^{わん}で、低い高台の付いた平底であり、口縁下に 1 週の朱色線帯を巡らせたのが唯一の装飾である。[口径 10cm、高さ 5cm、底径 6cm]

他の 3 点 (挿図 45,52) は大型の盃^{わん}内に入ったまま出土した。大きさは若干小さいが、形態は大型と小型が同一で、器表全面に朱色と黄色で施文されている。口縁には 2 週の平行線帯内に 2 週の点入波状文帯を描いており、底部の高台にも 1 週の朱線帯を配置し、器表面には上・中・下 3 列で火炎文式に表現した " 出 " 形と 6 ~ 8 個ずつの方点がある珠文を挿入して連続的に描いている。3 点中 1 点に

1 所属と職位は報告書刊行当時。

2 報告書 p.116 青銅甕 (図版 230-1・2, 図面 7--②) に該当。

は底に朱色で「馬朗」という2字の銘文が記されている。[口径9cm、高さ4cm]

残り1点(挿図51,53)は木心漆器で、蓋形である。内面は朱色、外面は黒色で、漆塗りした円筒形は厚さ0.1cm、幅1.0~1.2cmの竹4枚を連続して丸く曲げて付け、厚さ0.5cmの円形木板で底を作って挟んでいる。底の下は断面方形の円形態のものを補っており、その内側に脚部を挟み、また竹板で製作している。口縁に2周、底部付近に1周の朱色線帯を巡らし、その内にはまるで筆に顔料をつけて散らしたような文様の点列がびっしりと施文されている。しかし現在残っているものは全て顔料が脱落して分からなくなっている。[口径8.3cm、底径6.7cm、高さ5.7cm]

b) 漆器盒(挿図46~50, 54,55)

副葬品収蔵部内西南便から出土した。腐食と破損がひどく、破片として回収され、復元した。低い高台がある平底半球形の器身に半球形の蓋が被さる円形盒と考えられる。

杯の厚さ0.5cmの厚い木心に内面は朱色、外面は黒色で漆塗りされており、口縁下には幅0.4cmほどの朱色線帯を巡らし、器表には様々な動物文様を施文している。動物文の種類は、走駆する形態の鹿と馬(?)、飛翔直前の翼を広げた鳳凰、飛翔している龍(?)と外形が確実に分かるものが4個体分ある。

蓋は半球形の身部にもまた文様を施文しているが、確認が不可能である。口縁は杯を覆うことができるようにかえりが付いており、口唇は若干内弯している。[盒総高約12cm、口径12cm(図面復元)、杯高約6.5cm(図面復元)]

c) 漆器小盒(挿図44,56)

収蔵部内西南隅の青銅鼎上で出土した。他の漆器とは異なる方形の盒で、略報には2点が出土したと報告されているが、1点は蓋で、別の1点は底部片である。

蓋は円形の木心で、断面で見ると浅い半球形を帯びている。黒色の表面に、外縁は赤色、内面は黄色をした四葉座文を施文し、葉の周囲に十字形の黄色連珠文を施文している。

身部は厚さ0.1cm、幅1.0~6cmの竹心4枚を接合し、四角に曲げている。底は断面六角形の木心で、

身部に挟み付けることができるように端部を若干削っている。底の外面には蓋と同じく四葉座文と連珠文を施文している。[蓋口径:7.5cm、蓋厚:1.1cm、杯高5.5cm、杯一辺の長さ4.8cm]

d) 銀製漆器装飾(図版235-3、図面71)

図面71-①②遺物は重なったまま西便銀製冠帽の横から出土した。身部をなす木質は大部分腐食し、形態を確実に知ることはできない。

図面71-①は、厚さ0.1cmの銀板を浅い半球形に作り、周縁は折り返して覆輪(折板覆輪)としている。片側に小孔を開けて環を通し、②の小穴に取り付けたものとみられる。

図面71-②は、幅1.6cmの銀板を円形に作った後、片側にはC形に穿孔し、環を装着することができるようにしている。口唇は半円形に巻いた後、下端に2.2cm間隔で銀製釘を打ち、木製容器に結着したものとみられるが、釘は全て欠失している。図面71-①②は共にやや楕円形である。[図面71-①:最大幅14.8cm、高さ1.6cm、重量117.0g;図面71-②:最大幅15.8cm、高さ4.0cm、重量24.7g]

図面71-④は復元図を挿入したが、実際の出土状況は①が蓋の役割を果たしたものと推定される。

e) 漆器蓋の銀製装飾(図版235-3,4、図面71-③⑤⑥⑦⑧)

いずれも漆器や木器の蓋の装飾で、各種容器類と共に副葬品収蔵部内から出土した。

図面71-③は幅0.6cmの銀板上段約0.2cmは内傾させて円形に作り、下段は銀製釘で木材に結着させたが、釘は全てなくなって1箇所だけ残っている。図面71-④復元図と共に使用されたが、木器口縁に使用されたかどうかは確実ではない。[口径5.2cm、重量3.3g]

図面71-⑤は金製で、青銅甕に接して出土した。金板を曲げ、断面をU字形に作った後(内面が若干短い)、木器(漆器)の口縁に被せて4箇所を金銅釘で結着した。出土当時木質は大部分腐食し、破片のみ内面に若干残っていた。[口径10.4cm、高さ1.2cm、重量47.9g]

図面71-⑥は金銅製で、これもまた青銅甕付近から出土した。円形鑲を環状の釘^{かん}にかけ、八葉形の文様板を装着しているのが特異で、他の把手とは異なり木材に結着する方法が釘形になっている。文様板

は八葉の花形で、周縁部と葉とを区分するように列点文を入れ、それぞれの葉には直径 0.2cm の円点文を施している。[総高 3.6cm、八葉形文様板の幅 4.2cm、重量 13.3g]

図面 71-⑦⑧は鍍金銀製で、北便の銀製小盒上で 1 点、南便の金製盃^{わん}付近で 1 点が出土した。

直径 2.6cm の円形鍍^{かん}が三葉の心葉形地板に付き、連結環が抜けないように直径 0.6cm の円板を挟んで仕上げている。現在木心は全く残っておらず形態は不明であるが、厚さは約 1.0cm で、ほぼ扁平な木板を身部に使用していたようだ。[図面 71-⑦：最大横幅 8.0cm、総高 4.1cm、重量 33.7g；図面 71-⑧：最大横幅 7.9cm、総高 3.8cm、重量 26.9g]

原載：

慶州文化財研究所編 1994 『皇南大塚(南墳)発掘調査報告書』本文篇,文化財管理局文化財研究所:118-122.

慶州文化財研究所編 1993 『皇南大塚Ⅱ(南墳)発掘調査報告書』図版・図面篇,文化財管理局文化財研究所.

公開先：

『皇南大塚』南墳(本文)(韓国文化財庁 HP)：

http://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do?nttId=15961&bbsId=BBSMSTR_1021&pageIndex=1&pageUnit=10&searchCnd=tc&searchWrd=%ed%99%a9%eb%82%a8%eb%8c%80%ec%b4%9d&ctgryLrcls=&ctgryMdcls=&ctgrySmcls=&ntcStartDt=&ntcEndDt=&searchUseYn=Y&mn=NS_03_08_01

『皇南大塚』南墳(図版・図面)(韓国文化財庁 HP)：

http://www.cha.go.kr/cop/bbs/selectBoardArticle.do?nttId=15962&bbsId=BBSMSTR_1021&pageIndex=1&pageUnit=10&searchCnd=tc&searchWrd=%ed%99%a9%eb%82%a8%eb%8c%80%ec%b4%9d&ctgryLrcls=&ctgryMdcls=&ctgrySmcls=&ntcStartDt=&ntcEndDt=&searchUseYn=Y&mn=NS_03_08_01

付 2：

『皇南大塚 北墳発掘調査報告書』

漆器

シンチャンス
申昌秀 신창수

(文化財研究所 学芸研究士¹)

5) 漆器

大部分が木棺周辺に設けられた石段の東北便から山になって集中的に出土した。

大体 30 数個分になるものと見積もられるが、全て腐食がひどく、出土当時、耳杯とみられる 4～5 個分、内部が 4 区画に分かれた方形鍍盒とみられるもの 2～3 個分、盞とみられるもの 4～5 個分が確認されただけで、器形が分からないものが大部分であった。

器の心は全て木質で、木目が横に通った薄い木心でできたものと薄く削った網代状に編んだ竹皮を心にしたものが見られた(挿図 24)。

すべての器の内外面に漆を塗っており、大部分の内面は朱色、外面は黒色に漆塗りされ、器表面に朱色と黄色で各種文様を描いており、これとは対照的に朱色地に黒色で文様を描いたものも見られた(挿図 25)。文様は各種の鳥獣が主文様に描かれており、これと共に花文、草花文、唐草文など植物文と火焰文、鋸歯文、格子線文、珠文等が互いに複合的に施文されていた。

文様に対する説明は別に詳細に説明されているので、重複をさけてここでは説明が不足している一部遺物と器形をある程度推測することができる遺物を中心に簡略に説明するにとどめる。

図版 151-1 は耳杯とみられる木心漆器で、潰れた状態であるため、正確な器形を知ることができない。内面は朱色、外面は黒色に漆塗りし、器表面に文様はみられない。口径 10cm 前後の小型容器である。

図版 151-2 は器形が分からない口唇部破片で、内外面が共に黒色に漆塗りされており文様はない。木目が横になった薄い木心でできている。

図版 151-3、4 は方形鍍盒の破片で、薄い木心に内面は朱色、外面は黒色に漆塗りした。器内部を四分割し、外縁と仕切りの高さが 2cm で、一辺 14cm 前後の長方形容器である(挿図 26)。

図版 152-1 は耳杯形漆器の胴部破片で、黒色に漆 1 所属と職位は報告書刊行当時。